

聖書：ピリピ 2：14～16

説教題：世の光として輝く

日時：2017年1月29日（朝拝）

今日見る 14 節以降は 12～13 節に続く御言葉です。12 節と 13 節はピリピ書の中でも有名な御言葉で、特に救いにおける神の主権と人間の責任とがセットで語られている御言葉として有名です。パウロはそこで聖化の歩みのための励ましのメッセージを語りました。あなたがたは恐れおののいて自分の救いの達成に努めなさい。それが可能なのは神が御心のままにあなたがたの内に働いて志を立てさせ、事を行わせてくださるからであると。私たちは信仰を持ったら、あとは自分の力でゴールに向かって階段を上って行くではありません。私たちが知るべきは神が全プロセスにおいて、救いの最終地点に至るまで私たちを導いてくださるということです。その神に目を上げ、神を信頼して、救いの最終ゴールに向かっての取り組みをなさいとパウロは勧めました。

この 12 節と 13 節は聖書の中でも最も有名で重要な御言葉の一つですが、そうであるがゆえに私たちが陥りがちな危険があります。それはそこだけを切り取って考えてしまうことです。前後の流れを考慮せず、独立した御言葉として読んでしまうことです。しかしパウロはある文章の流れの中で 12 と 13 節のみことばも語りました。ですからその文脈を私たちは良く考慮しなければなりません。そうすると分かって来ることは何でしょうか。それは今日の 14 節以降が、パウロがピリピ人たちに勧めたいと思っていた具体的な事柄であったということです。彼は 12 節で「恐れおののいて自分の救いの達成に努めなさい」と言いましたが、その彼が何を考えていたのかが、この 14 節以降に示されています。

まず 14 節：「すべてのことを、つぶやかず、疑わずに行ないなさい。」これはピリピ人たちの間につぶやかみや疑いがあったということでしょうか。おそらくそうだったと考えられます。2 章前半では、一致についての勧めが語られました。2～3 節：「あなたがたは一致を保ち、同じ愛の心を持ち、心を合わせ、志を一つにしてください。何事でも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだって、互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい。」このように勧められなければならない状況がピリピ人たちの間には

あった。ですから彼らの間には互いに対するつぶやき合いがあったと考えられます。また「疑わずに」と訳されている言葉は、他の聖書では「論争せず」とか「理屈を付けず」と訳されています。新改訳でも同じ言葉は他の箇所では「言い争う」と訳されています。つまりピリピ人たちの間には、お互いに対する疑いや言い争いがあったということです。これらの言葉は旧約時代のイスラエルの、神に対するつぶやきや疑いを思い起こさせる言葉でもあります。イスラエルの民は、荒野を旅する間、しばしば神に向かってつぶやきました。水がない！肉がない！我々をここで死なせる気か！エジプトにいた方がまだ良かった！と。そのように神に向かってつぶやき、また目の前にいたモーセにつぶやきました。彼らはエジプトの奴隷状態から救い出され、約束の地に向かって巡礼する途上にありました。その彼らの特徴づけていたのが、このつぶやきであり、言い争いでした。翻ってそれを私たちに当てはめて考えてみると、私たちもまた罪の奴隷状態から救い出され、天国を目指して進んでいる者たちです。その私たちにも同じ特徴が見られるということはないでしょうか。旧約のイスラエルと同じように日々つぶやき、不平不満ばかり口から漏らして、論争に明け暮れていることはないでしょうか。

私たちはつぶやいたり論争することは、私たちの救いの本質的部分とはあまり関係がない事柄のように思うかもしれません。しかし実にこれは私たちの聖化の歩みと深い関係のあることなのです。自分の救いの達成と関わることなのです。そこで問われているのは、やはり私の神への信仰でしょう。神への信仰が正しい状態にあるなら、つぶやきは私たちの口からは出て来ないはずであるに違いありません。お互いに対しても、先に見た2章3節のように取り組んでいれば、言い争いに明け暮れることはないはずです。果たして自分の生活を振り返って、そこにつぶやきがたくさんあることはないでしょうか。不平不満や言い争いが満ちていることはないでしょうか。パウロは「すべてのことを、つぶやかず、疑わずに行ないなさい」と言っています。「自分の救いの達成に努めよ」とパウロが言った時、まず彼が考えていたことはこのことだったのです。私たちは自分の信仰の状態を、この光のもとで確かめたいと思います。そして神への信仰を正しい状態に正していただき、またお互いに対してへりくだり、志を一つにして歩むことを私の聖化の課題として取り組みたいと思います。

さて、このように歩む目的が15節以降に記されています。まず言われているのは「あ

なたがたが、非難されるところのない純真な者となり」ということです。「非難されるところのない」とは「後ろ指を指されない」ということです。1章27節では、ここしばらくの勧めのエッセンスとして「キリストの福音にふさわしく生活しなさい」（欄外27別訳：「御国の民の生活をしてください」と語られました。クリスチャンはこの世に生きていますが、天に国籍を持つ天国人です。ですからその生活によって天国人のあかしを立てなければならない。後ろ指を指されるようなことになってはいけません。そしてただ人の目を気にして外側だけを整えれば良いものではありません。続いて「純真な者となり」とあります。これは混じりけがないとか、純粹などという意味です。私たちは内側からきよめられて純真な者となる必要があるのです。そのために「すべてのことを、つぶやかず、疑わずに行なう」という聖化の道を進んで行く必要があるのです。

もう一つ、その目的としてここに並べて語られていることは「傷のない神の子どもとなり」ということです。私たちはイエス・キリストを信じてすでに神の子どもとされています（ガラテヤ書3章26節）。しかしまだ完全な状態に達しているわけではありません。ですから「傷のない神の子どもとなるように」と言われているわけです。「傷のない」という言葉は、旧約時代の神にささげるいけにえが一切しみや傷のない完全なものでなければならなかったことを反映しています。私たちはすでに神の子どもですが、このような傷のない完全な神の子どもとなることを目指して進んで行かなければなりません。

そういう神の子どもとして私たちはどういう特性を発揮すべきでしょうか。ここに消極的面と積極的面から二つのことが述べられています。まず消極的面として「曲がった邪悪な世代の中であって、それらから区別されている」ということです。すなわち私たちは周りと同化してしまってはならない。私たちはしばしばこの世であって周りとは違った存在になりたくない、この世の人々とむしろ同じ仲間でありたいと思いますが、それは聖書が述べている神の召しとは反対方向の歩みです。むしろ神の子どもとされている私たちは、この世と違っていなければならない。曲がった邪悪な世代の中であって、それらに染まらず、それらとは対照的な歩みを求めなければなりません。

これをより積極的な面から言えば、それは16節にありますように「彼らの間で世の

光として輝く」ということです。他の日本語の聖書は「世にあつて星のように輝き」と訳しています。月や星が太陽の光を受けて輝くように、私たちは神の光を受け、それを照り返して輝くのです。実にこのような意味で光を輝かせることが、イスラエルの召命として旧約聖書で言われていました。イザヤ書 42 章 6 節：「わたし、主は、義をもってあなたを召し、あなたの手を握り、あなたを見守り、あなたを民の契約とし、国々の光とする。」 49 章 6 節：「主は仰せられる。『ただ、あなたがわたしのしもべとなって、ヤコブの諸部族を立たせ、イスラエルのとどめられている者たちを帰らせるだけではない。わたしはあなたを諸国の民の光とし、地の果てにまでわたしの救いをもたらす者とする。』」 58 章 10 節：「あなたの光は、やみの中に輝き上り、あなたの暗やみは、真昼のようになる。」

そのために大事なことは、16 節の「いのちのことばをしっかりと握って」ということでしょう。自分自身を見るなら、世の光として輝くことなんて無理な注文だと思います。しかしそのカギは「いのちのことばをしっかりと握ること」にあるのです。このいのちのことばとは福音のことです。その福音が「いのちのことば」と表現されているのは、この福音こそが人にいのちをもたらし、人を新しく生まれさせる言葉だからでしょう。I ペテロ 1 章 23 節：「あなたがたが新しく生まれたのは、朽ちる種からではなく、朽ちない種からであり、生ける、いつまでも変わることはない、神のことばによるのです。」また御言葉は人を新しく生まれさせるだけではなく、新しく生まれた人のいのちを日々支える御言葉でもあります。I ペテロ 2 章 2 節：「生まれたばかりの乳飲み子のように、純粋な、みことばの乳を慕い求めなさい。それによって成長し、救いを得るためです。」この純粋で栄養満点のミルクを飲む時に、私たちはいのちを豊かに内に持つ者となるのです。そうして日々霊的に健康に成長し、筋肉をつけ、神の子どもとして発展を遂げて、世の光として輝くことができるのです。

今日は 16 節前半までとし、残りは次回見たいと思いますが、最後に 16 節最後にある「キリストの日」という言葉に注目したいと思います。パウロはこの日を見つめ、この日に焦点を合わせて彼の働きに励んでいました。そしてパウロはただ自分がこの日を見つめて歩んでいると証しするだけでなく、ピリピ人たちもこの日に目を向けて歩むようにと励ますためにこのことを語ったのではないのでしょうか。「キリストの日」とはどん

な日でしょうか。すでに1章6節で見ました。それは私たちの内に良い働きを始めてくださった神が、ついにそのみわざを完成させてくださる日です。また1章10～11節では、私たちがその日には「純真で非難されるところがない」者として神の前に出て行くと言われていました。今日の15節で「非難されるところのない」とか「純真な」と言われると、私たちはとても自分には到達不可能な課題であるようにも思います。しかしイエス・キリストの日には、その最終状態に必ず達すると言われていています。とするなら、私たちもそのキリストの日を見据えて、その日には必ずそのゴールに達することを確信して、聖化の歩みへと進んで行くべきではないでしょうか。

パウロは言いました。私たちの召命は、曲がった邪悪な世代の中であって、傷のない神の子どもとなり、世の光として輝くことであると。そのために私たちが今ここで取り組むべきは、「すべてのことをつぶやかず、疑わずに行なう」ことであると。そのためのカギはいのちのことばをしっかりと握ることであると。そうして非難されるところのない、純真な者となるための道を進み、神の光を輝かせ、この光へ人々を招く歩みに進みたいと思います。